

# 連携による商店街づくり、まちづくり

## ～中島商店会コンソーシアムの歩み～

小野寺芳子  
(中島商店会コンソーシアム  
代表幹事)

### 目次

- |                            |    |
|----------------------------|----|
| 1. はじめに（1つのSと4つのC）         | 59 |
| 2. 活性化計画策定（ふらっとホットな～る中島事業） | 60 |
| 3. 事業の実施（催事数約100件の年も）      | 61 |
| 4. 特性・連携（商学、医商連携）          | 64 |
| 5. 広報（発信）と数値での評価           | 65 |
| 6. 課題（財政面と運営費の確保）          | 67 |
| 7. まとめ（連携・ネットワークづくり）       | 68 |

## (要 旨)

中島商店会コンソーシアムは室蘭市内唯一の百貨店が閉店した平成22年、なかじま、中島中央、シャンシャン共和国、中島西口の4商店街振興組合と中島商店会の5団体によって、共同体を意味するコンソーシアムを発足させ、各種事業を進めてきました。

24年には「ふらっとホットな～る中島事業」(3カ年計画)が国の地域商店街活性化法に基づく認定を受け、「回遊できる商店街」「コミュニティの場となる商店街」「多世代が訪れる商店街」を目指しています。28年は室蘭市から観光案内所の運営委託を受け、観光客の商店街への取り込みも行っています。

中島商店会コンソーシアムのキーワードは「連携」です。5団体による連携事務局の設置や無料休憩所の「ふれあいサロンほとな～る」を運営する一方、商学連携や医商連携など、地域の特性を生かして、多くの団体との連携によって事業が展開されています。今後も「連携」が、商店街の活性化、まちづくりの鍵と考えています。



## 1. はじめに（1つのSと4つのC）

室蘭市の東に位置し、JR東室蘭駅西口側にある中島町の商店街は、なかじま、中島中央、シャンシャン共和国、中島西口の各商店街振興組合と、中島商店会の5団体からなり、加盟店は合わせて約200店となっています。製鉄所の城下町として発展し、昭和50年代には丸井今井室蘭店や長崎屋中島店が出店、さらに近年は大型商業施設のモルエ中島がオープンするなど、両隣の登別、伊達両市を含めた西胆振地方の中心商店街として、認知されるようになりました。

ところが室蘭市の人口は最盛期の18万人から9万人へ半減、平成22年1月には、市内唯一の百貨店だった丸井今井が閉店し、個店への影響が懸念されるとともに、店主の高齢化や後継者不足等によって、各団体の弱体化も心配されました。そこで各団体のトップが集まり、出した結論が5団体の連携です。具体的には連携事務局の設置と、空き店舗を使った無料休憩所「ふれあいサロンほとな〜る」（以下「ほとな〜る」）の運営で、北海道の緊急雇用創出推進事業・商店街等連携活性化推進事業を活用し、同年9月、中島商店会コンソーシアム（以下「コンソーシアム」）が発足しました。

翌年3月までの半年間、健康講座やカルチャー教室等各種事業を進め、さらに商店街利用者のアンケート調査を実施し、利用者、市民から望まれる商店街の役割、機能について「1つのSと4つのC」を今後の運営の柱に据えました。

「ほとな〜る」の役割では

- ① Support（サポート）買い物客やお年寄りの休憩所、赤ちゃんの授乳・おむつ替えの場所（赤ちゃんの駅）、不審者対策として児童などの駆け込み機能（こどもを守る家）等
- ② Community（コミュニティ）よりよい地域社会を築くため、サークル等各種市民団体や個人が、誰とでも語り合えるコミュニティ機能の充実と、場所の提供
- ③ Culture（文化）各種展示会や文化教室の開催等、文化活動への場所提供や支援  
地域の商業振興を図るためには
- ④ Challenge（チャレンジ）空き店舗対策等を進め、新たな商業者を迎えるためのチャレンジショップの開設。人材育成のための各種研修会等の開催
- ⑤ Chain（チェーン）地域の商業振興、商店街づくりの先頭に立つ各商店街振興組合や商店会と連携した事務局の設置―を据えました。

さらにアンケートで市民から要望の高かったConcierge（コンシェルジュ＝まちな案内所）の機能も加えながら、利用者、市民のため、商店街の賑わいづくり、まちづ

くりを進めることにしました。

組織については5団体の連携組織であるコンソーシアムを継続し、事務局を維持。それまでの事業を継続し、さらに発展させながら、1年後を目途に地域商店街活性化法に基づく「商店街活性化事業計画」（以下「活性化計画」）の国の認定を目指すことになりました。3カ年間の計画策定を進め、計画終了後に自立できる組織にする考えでした。

## 2. 活性化計画策定（ふらっとホットな～る中島事業）

地域商店街活性化法に基づく活性化計画の策定は、北海道内の商店街では当時、わずか1団体にとどまっていたことから、北海道も希望する商店街にコンサルタント会社の担当者を据え、支援する事業を進め、コンソーシアムも平成23年度その対象となりました。

まず土台となったのは、コンソーシアムが前年11、12月に実施した500名以上にのぼる「商店街利用者調査」と、約130名の「会員・組合員意向調査」のアンケート結果です。商店街への要望、必要と思う公共的な施設や商業サービス施設、機能等を調査しました。その結論が1つのSと4つのCの役割、機能です。

活性化計画策定の前段では、ワークショップも実施しました。その中で最も印象に残っているのは、室蘭工業大学の学生とのワークショップです。大学と中島の商店街の距離は直線で2.5km。バスで約10分、徒歩でも40分ほどの距離ですが、「商店街で買い物をしますか」の質問に「ほとんどしない」との答えが返ってきました。商店街関係者にとっては大変ショックな出来事でした。



商店街利用者らのアンケート調査(2010.12)



学生と商店主のワークショップ(2011.10)

アルバイトや買い物等で中島の商店街を訪れる機会の多いはずの学生が、「買い物はしていない」。商店街関係者、コンサル等とのやりとりの中で、教職員らを含めると3千数百人の大学関係者から商店街は見放されているのではないか、魅力がないのではないか、頭を抱えながらも、学生らの取り込みを考えることになりました。

また、中島の商店街でもう一つ、特徴的なのは病院関係の多さです。製鉄記念室蘭病院をはじめ、周辺を含めると、歯科を除いた病院だけで約20あり、訪れる患者や見舞客、医療従事者を合わせると、ほぼ毎日、2千数百人が中島の商店街を訪れる計算になります。このことから活性化計画の具体的な事業については地域の特性を生かした商学連携、医商連携を活動の柱の1つに据えました。

全国商店街支援センターの現地マネージャー育成事業に参加し、全国各地の商店街活性化事例も参考にしながら、約10カ月間をかけ出来上がった平成24年度から26年度まで3カ年の活性化計画「ふらっとホットな～る中島事業」は、「回遊できる商店街」「コミュニティの場となる商店街」「多世代が訪れる商店街」を目指すことになりました。

具体的な事業としては約10年間続いている無料買い物バス「お元気号」（2カ月に1度3路線を運行）に合わせ行っている「お元気講座」をはじめ、各種「ほっとな～る講座」の開講。「商店街を回遊してもらおう事業」では一店逸品運動に合わせたスタンプラリーや、ミニまち歩きツアーの実施、学生が集まる商店街づくりでは、学生による商店街の魅力発信事業等を掲げました。

「ふらっとホットな～る中島事業」は平成24年4月、法人格を持つ4商店街振興組合連名で、北海道経済産業局から地域商店街活性化法に基づく活性化計画に認定され、いよいよ活性化事業がスタートしました。

### **3. 事業の実施（催事数約100件の年も）**

活性化計画の認定に合わせ、24年度は国の中小商業活力向上事業を活用することにしました。計画の認定を受けたことで補助率は2分の1から3分2に引き上がります。具体的には、商売の基本に立ち返るための「おもてなし心得3か条」の制定と、セミナーの開催、商学連携事業として雑誌を置き閲覧してもらおう「まちなかライブラリー」の開設や、学生制作の2種類のマップ作り。商店街を回遊してもらおう事業として、一店逸品運動の展開とスタンプラリーの実施等を進めました。



いがらしゆみこさんとのまち歩き(2013.7)



歯科医師を招いて健康講座(2014.5)

このほか全国商店街振興組合連合会（全振連）の10分の10の補助事業によって東北復興支援物産展の開催や、シニアカーやベビーカーの無料貸し出しを行いました。

活性化計画2年目の25年度は、全振連のやはり10分の10の補助事業・地域商店街活性化事業（限度額400万円）をほぼ満額使って「人と地球に優しい中島事業」として、漫画家・いがらしゆみこ氏が描いた中島町のイラストの地を巡るミニまち歩きや、うどん打ちや工作教室の市民講座、医師会等と連携した健康教室等を開催。さらに一店逸品運動として冊子制作や逸品巡り、被災地の商店街の協力を得た復興支援物産展の開催、一部太陽光発電を使ったイルミネーションの設置等を進めました。

計画3年目の26年度も全振連の地域商店街活性化事業（限度額800万円）をほぼ満額使わせてもらい、事務局が独自にデザイン、手作りした、ゆるキャラの「ほとなる君」を活用して、制作した缶バッジを身に付けていると特典がある事業をはじめ、一店逸品運動ではまちゼミを新たに加えました。このほか、無料買い物バス「お元気号」を毎月15日ころに運行、それに合わせ、お元気講座や健康講座、地元産品が当たる「お元気抽選会」を開催。さらにミニまち歩き、市民講座、3年続けての「おもてなしセミナー」等を行い、被災地復興支援物産展、フォトコンテスト、イルミネーション、ホームページのリニューアルも進めました。例年の「ほっとな〜る」の催事数は数十件から7、80件ですが、この年は約100件となりました。

また、同年は、国の商店街まちづくり事業によって5団体で合わせて17か所に防犯カメラ等を設置し、防犯と安全にも力を注ぎました。



27年度はソフト面に特化した国等の補助事業は特になく、室蘭商工会議所の元気づくりファンド事業を活用して「お元気・健康講座」「スタンプラリー」「復興支援物産展」を行い、一店逸品運動も参加料を有料化して実施しました。28年度は、補助事業は全くありませんが、これまで培った経験や各団体等との連携によって、お金は掛けなくとも数十件から7、80件の催事が見込まれています。

#### 4. 特性・連携（商学、医商連携）

最初に述べた通り、中島町の商店街の特性・特徴は大学・室工大が近いことと、医療機関・病院の多いことです。特に大学との商学連携事業は、コンソーシアム発足時からアドバイザーに建築関係の教官をお願いしたこともあり、その教官のゼミの学生が毎年、コンソーシアムの担当者となって、一緒に事業を進めています。計画の段階ではワークショップ等への参加でしたが、平成24年度から連携事業が本格化しました。同年度はテーブル、ベンチ、雑誌用の本の台を大学のプロジェクトの助成を受け材料を購入し、学生が手作りしました。椅子についてはコンソーシアムが「椅子のオーナー」制度を設け、1脚5千円でオーナーを募り、背にはオーナーの名前を刻んで30脚を購入しました。また、雑誌中心の「まちなかライブラリー」を学生が実行委員会を作って運営に当たるようになり、「ほとな〜る」は、木製のテーブル、椅子と若い人向けの雰囲気となりました。それまでのお年寄り中心の来訪者から若い人も目立つようになりました。



学生が運営するまちなかライブラリー(2012.12)



ビブリオバトル世界大会(2015.10)

商学連携事業は25年度、雑誌用の本箱づくりと「ほとな〜る」のサインづ

くり、26年度は展示用ボードの設置や、赤ちゃんの授乳やおしめを取り換える「赤ちゃんの駅」の改修、27年度は子供用「段ボールハウス」の設計・設置等子育て事業に力を入れ、28年度もQRコードを活用して外国人観光客向けに中島町のお店を紹介する等、毎年学生と一緒にになった取り組みを行っています。ほとんどが大学や室蘭市の補助、助成制度を活用していますが、今年5年目となった「まちなかライブラリー」については3年目以降、コンソーシアムが独自に補助しています。

学生との商学連携事業ではこのほか、室工大の公式サークルであるビブリオバトル部が「ほとな〜る」で定期的にイベントを続けています。お気に入りの本を5分間の持ち時間で紹介する書評合戦の「ビブリオバトル」は、プレゼン能力を高める効果もあり、全国の大学に広がっています。室工大のビブリオバトル部についても活動を続けるうちに社会人中心のサークルもできるようになり、26年からは留学生らも参加して「ビブリオバトル世界大会」が毎年開かれています。このほか、華道部の展示や、ロボット、ロケット関係サークルの発表、展示等も行われています。ワークショップで「商店街で買い物をしますか」の質問に「ほとんどしない」と答えていた学生も、交流が続く中で、コーヒー豆や、教官への記念品を購入する等、それなりに商店街を利用していることが分かりました。商学連携事業は今後もさらに進展するものと思っています。

もう一つの特性を生かした医商連携事業は、コンソーシアムが発足した平成22年10月から製鉄記念病院関連で、室蘭市から業務委託を受けている地域包括支援センター「憩」と協力して、毎月15日ころに介護や健康関係の「お元気講座」を開いています。また、24年度から27年度までは室蘭市医師会、室蘭歯科医師会、北海道薬剤師会室蘭支部の協力を得て、地元の医療関係者が講師となって年4回、健康講座を開いており、「お元気講座」を合わせると6年間で70回以上にもものぼります。中島町では病院の開業がまだ続いており、今後も医商連携事業の充実を図っていく考えです。

## 5. 広報（発信）と数値での評価

コンソーシアムの存続を決めた後、活動を商店会員、組合員に詳しく知ってもらわなければ、さらなる存続は難しくなると考え、24年4月から、広報誌ともいえる「こんそ通信」を毎月25日に発行しています。50号までは新聞風、51号からは手書

き風の通信で、現在65号を数え、ファックスや手渡しで約200人の会員、組合員に届けています。また、同じ年度から国の補助事業等を活用してホームページを開設、コンソーシアムの活動や「ほとな〜る」の催事予定等を掲載し、毎月3、4回は更新しています。年間アクセス数は約1万件にとどまっていますが、ユーザーの9割以上が室蘭市以外の市町村で、地元を離れた人が故郷の出来事を知るのに役立っているのうかがえます。

また、「お元気講座」をはじめ、各種の催事の前には報道機関15社が加盟する室蘭市の記者クラブに報道を依頼。そのお知らせや当日の催事の様子の記事掲載、さらにラジオ放送等にも流してもらい、その数は年間で100本前後にのぼり、コンソーシアムの活動を広く市民に周知しています。「ほとな〜る」を訪れる利用者は年間1万3千人から1万4千人台ですが、中身として市民の中にもこの6年間でかなり定着したものと考えています。



コンソ通信1号



コンソ通信64号

このほか、収益事業をからめ25年度から毎月1回、異業種交流の「居酒屋塾こんそ」を開催、毎月講師を変えて交流を深めるとともに、コンソーシアムの存在感を広めることにも役立っています。28年9月には42回目を迎えました。

評価については日常の商店街利用者、商店街関係者の聴き取りのほか、数字による評価も加えています。特に通行量調査については、商店街の活性化計画を策定準備中

の平成23年から毎年10月に休日と平日の2日間、5か所で調査を実施しています。最初の年は、調査日が丸井今井室蘭店の跡地にできたヤマダ電機のオープン直後にぶつかってしまい、その影響を受けたこともあって2、3年目の通行量（歩行者）は減少傾向でしたが、4、5年目から増加傾向に転じ、27年はヤマダ電機のオープン直後にほぼ回復しました。

もっとも唯一の百貨店だった丸井今井が営業していたころと比べると当然のように通行量は減っています。

商店街の空き店舗状況、「ほっとな〜る」の来訪者数・催事数、一店逸品運動実施後のアンケート調査による各店の売り上げ状況等、一応、数値にできるものは、できるだけ数値で評価をするように心がけています。

## 6. 課題（財政面と運営費の確保）

今後の課題で最も重要なのが財政面、運営費の捻出です。初年度の半年間は北海道の緊急雇用創出推進事業を活用し、人件費をまかなうことができましたが、2年目以降は人件費を補助してくれる国や北海道の事業はなく、自前での調達となります。コンソーシアムを構成している5団体が事務委託費等で負担する一方、チャレンジショップ（物販、飲食）の出店料、市民の手作り作品を展示・販売するレンタルボックスの使用料・手数料、「ほっとな〜る」での催事や会議、展示の際の利用料等が主な財源ですが、家賃、人件費、光熱費等で年間数百万円かかる運営費をまかなうには到底足りません。

そこでコンソーシアムの継続を決めた23年度から、サポーター制度を設けました。商店街を中心に1口1万円でサポーターを募り、毎年30口から40口が集まります。屋外にあるコンソーシアム設立の経緯等を書いた看板に1年間、サポーターのお名前を掲載します。また、別にサポート企業広告を募って2～10万円で看板を掲げてもらい、サポーター、サポート企業の収入は年間で100万円を超えるようになりました。

さらに「ほっとな〜る」の家賃、光熱費の一部を助成してくれる室蘭市の制度も23、24年度のうち1年8カ月利用しましたが、期間が決められています。25年度以降は、事業費は別として運営費はすべて自主財源でまかなわなくてはならず、構成団体の負担も限度を超える状況になってきました。

それでも28年度は室蘭市が中島町へのホテルの進出や観光客の増加に伴い「ほっ

とな～る」内に「まちなか観光案内所」を設置し、その運営をコンソーシアムに業務委託してくれました。これによって、各団体の負担は変わらないものの、収支はほぼ均衡がとれる範囲に近づきました。また、発足当初、5番目のCに掲げていた、Concierge（コンシェルジュ＝まちの案内所）も実現しました。

今後は「まちなか観光案内所」の業務委託を継続してもらう一方、出店料、利用料のほか、新たな収入源を見つけて財政面で安定していくことが、コンソーシアム維持のための最大の課題と言えます。

## 7. まとめ（連携・ネットワークづくり）

「商店街づくりは、まちづくり」がコンソーシアムの理念です。5団体による連携組織だからこそ、連携による事業、ネットワークづくりがその推進役です。今後も各種事業を進めるにあたっては、大学、病院、文化、スポーツ団体等と幅広く連携していきます。また、発足以来、事務局員は2代続けて美術大学出身者で、日常的に大学の建築関係の学生らと一緒に「ほとな～る」全体の雰囲気づくりやサインづくり、子供のスペースづくり等を行っています。「アート色」を出しながら、こうした融合こそ、私たちが望む自然な形での「連携事業」と考えています。さらにこの6年間の経験でそんなにお金をかけなくとも、市民に喜んでもらえる事業もたくさんあることを知りました。その、かなめが連携事務局であることも構成5団体のメンバーは理解しています。

子供からお年寄りまで市民がいつも「ほとな～る」居場所づくり、いつも何かやっている「ほとな～る」を今後も目指していきます。



まちなか観光案内所オープン(2016.4)



建物の上にはサポート企業の看板が(2016.8)